地域文化資源を生かした学び
～登呂遺跡にて～

キーワード　地域文化資源、稲作、博物館、環境

○取り組んだきっかけ

大学の授業「博物館実習」では、博物館での実習が義務付けられています。常葉大学では学内の常葉ギャラリーのほか、地域のいくつかの博物館や文化団体のご協力をいただき、学生たちに実習をしてもらっています。数年前からは静岡市立登呂博物館にご支援いただき、登呂遺跡と博物館、地域との連携について学んでいます。

○活動の目的

博物館は、調査研究をとおして文化財を収集、保全し、展示によって市民に学びの場を提供する施設です。とくに歴史系の博物館は、その地域の文化財と密接な関係を持ちます。登呂博物館での実習を通して、博物館の活動を学びます。

○具体的な内容

登呂遺跡は、日本で最初に発見された弥生時代の代表的な遺跡です。この発見によって、初めて弥生時代の様子が、とりわけ稲作の実態が明らかになりました。日本の現代考古学がここから出発したとしても過言ではなく、一般市民がこぞって発掘作業に参加し、歴史は自らの手で実証的に探究されるのだという戦後民主主義のシンボルでもありました。そのため社会や歴史の教科書には必ず載っている、全国的に有名な遺跡となり、国の特別史跡にも指定されています。

ところが近年は、日本各地で大型の遺跡発掘が相次ぎ、登呂遺跡の知名度は相対的に落ちてきています。静岡市や登呂博物館は、いまいちど登呂遺跡の価値向上や活用をはかろうとして、様々な取り組みをしています。

そのひとつに「水田サポーター」の活動があります。遺跡内に復元した水田を使い、市民が一年をとおして稲作を体験しながら、その維持と活用を担うものです。博物館実習生もそれに参加し、学芸員や指導員のもと、代掻き、田植え、除草、追植、稲刈り、はざ掛け、脱穀、籾摺りと一連の作業を担当しました。そのなかで、稲作がどのように地域の環境と密接に関わりながら行われてきたのか、その工夫や歴史について学びました。かつてはどこにでも見られた藁なども、今の学生にとっては新鮮な素材であり、その藁やもみ殻が様々に活用されることに驚く者も多かったです。また外来生物が苗を食べてしまうという被害も経験し、環境問題を考えるきっかけともなりました。

登呂博物館が主催するイベント「ハッピートロウィン」にも参加しました。弥生時代の衣服「貫頭衣」を着て弥生人に仮装し、イベントの受付、炊飯体験、コンサートの演出などを行いました。遺跡全体の雰囲気づくりを醸成するとともに、食物の恵みについて、古代人の感謝の気持ちにも思いをはせました。

登呂博物館は、これらの活動を市民とともに行うことを通して、地域文化資源の保全と活用をはかっています。それは歴史の学びという枠を超えて、環境や地域振興など、さらに広い学びを得る場として、再認識されていく契機ともなります。学生たちは地域文化資源のポテンシャルを、身をもって感じたことでしょう。

○期待される効果

登呂遺跡はあまりにも有名で、聞きなじみのある遺跡です。しかしだからこそ、当たり前に思われ、その価値を見過ごしがちになっているのではないでしょうか。地域の文化資源は、身近であるがゆえに看過されがちなのかもしれません。古くからある文化財は、文化や環境について学ぶことのできる格好の教材です。登呂遺跡に限らず、身の回りの文化財をいまいちど振り返ることは、SDGsを推進するためにも、たいへん有効な取り組みとなるでしょう。

堀切正人
教育学部 生涯学習学科
教授

連携先

静岡市、静岡市立登呂博物館